

現場からの報告

国語なんかできなくても…

佐々木 律

高校二年生の現代文で筒井康隆の小説『北極王』を音読していたときのことだった。主人公の少年と自分の息子の姿が重なってしまい、突然涙があふれてきた。少し間を置いて、再び読もうとするとまた熱いものがこみ上げてくる。それでもようやく最後まで読み終えて、我ながらなんと感動的な朗読であるか、と生徒たちの熱いまなざしを期待して教室を見渡すと、彼らは実に居心地の悪そうな様子である。「いや、だからその、ね、とつてもいい小説だと思っただけだ」。照れ隠し半分をやつとのことです。言った私に、ある生徒がとどめを刺した。「でも先生、泣くほどのことじゃないでしょう。」

これとまったく逆の立場になったこともある。山田詠美の小説『ひよこの眼』を一読し、感想文を翌日の宿題としたときのことだった。ふだんよりはるかに提出状況がよい。おまけにほとんどが「何度も読み返した」「泣けて泣けてしかたなかった」といった真情あふるるコトバで綴った感想文である。かつて恋人を自殺で失った、その取り返しのつかない思いを回想する文章に、言い

ようないせつなきがあることは私も認める。しかし「泣くほどのことじゃないでしょう」。私は生徒たちの感想文を読みながらすっかり白けた気分になってしまった。

高校生の頃の私だったらきつと、山田詠美の文庫本を片端から買い求めていることだろう。しかし今の私にとってその胸が苦しくなるような共感「懐かしさ」の対象であつて、もはや「泣くほどのこと」ではない。居心地の悪さを感じたのは、彼らの真情あふるるコトバのいくつかをかつて私も使った覚えがあるからである。反対に『北極王』が高校生にとって「泣くほどのこと」でなかったのは、私の示した父親の感情が彼らにとって未知のものであつたからであろう。彼らが見せた居心地の悪さは未知の感情に対する戸惑いであり、『ひよこの眼』の感想文を読んだ私が感じた気恥ずかしさとは明らかに質が異なる。

ところが『ひよこの眼』の感想の中にひとつだけ、「語り手の少女はもう大人になってしまつていて、実は恋人の死を乗り越えている。だからこんなふうに淡々と語ることができるとか思う」というものがあった。私はこれこそ『ひよこの眼』を読む上での基本的な足場の取り方であると思つた。これさえ確認できれば、あとはどう読みとろうが個人の自由であると思つた。ただ残念なことに私は、その足場の取り方を教室できちんと教えることができなかった。「君は小説の読み方を知っているね」と評価することはできたが、どうすればそういった読み方を身につけることができるのか、具体的に示すことができなかった。

授業であるにもかかわらず、読み方を具体的に示せないことが

私には大きな不満だった。そのことがきつかけとなり、教室で文学を扱うことに危うささえ感じるようになった。文学教材を扱うことが、喪失や弱さをいはずらに嘆くだけの感情的なコトバのやりとりになってしまっているからである。そういつた疑問に対し「人間の弱さを教えるのも教師の仕事だ」と答えるのは詭弁である。教師は教室で絶対の強者なのだ。「人間の弱さ」を教える立場ではない。

どうすれば読む力がつくのか。この問いかけに対し、「とにかくたくさん読むこと」としか私には答えようがなかった。数学だっただけたくさん演習問題を解けて言うじゃないか。あれと同じさ。少なくとも自分はこれまでそうやってきた。そう考えることで私は思考を停止していた。それは教師の保身でしかない。彼らは「解法」を質問しているのだ。「とにかくたくさん解け」では答えにならない。

かつて「読むこと」は情報を得る上で最も優位に立つ手段だった。より多く読むことはより多く知ることと直結した。現代がそうでないことは誰の目にも明らかである。「読むこと」にこだわらずとも多くの情報を得ることができるようになった。その影響は文学にも著しい。映画やマンガ、テレビといった媒体を通じて私たちは、洋の東西を問わず多くの文学作品に接している。活字媒体による受容以外を認めないとしたら、現代の私たちにとって文学は「読むこと」に代わるものになるだろう。

文学の感動を伝えることが国語科の使命であると考える限り、

「国語なんかできなくても困らない」という理屈に対抗することはできない。「読むこと」などできなくても、他の媒体を通じていくらでも感動できる。活字を追うことの意義を説いたところで「価値観の相違」とかわされるだけである。「電卓があるから数学なんかできなくても困らない」という理屈をこねる相手に対し、筆算の意義を説くようなものだ。

近年「書くこと」「話すこと」が注目を集めているのも、そういった「読むこと」の地位低下がもたらした現象の一つではないかと私は考えている。「読むこと」「聞くこと」は受動的・受信型であり、「書くこと」「話すこと」は能動的・発信型であるといった観点からの論議は、言語をめぐる現状に対するきわめて正当な反応であろう。

今後の国語教育において「書くこと」「話すこと」はますます重視されていくだろう。しかしそこに「読むこと」重視の国語教育ではもうだめだから、という安易さがあるとしたら、それは別の意味で問題である。「学習者主体の国語教育」を訴える論議の中には「黙って座らせているより書いたり話したりさせたほうがはるかに主体的である」といった程度の実質しか持たないものも散見される。そういった観点の浅薄さを、私は現任校でいやというほど見せつけられているだけに、どうしても警戒してしまう。現任校では生徒と「自由」や「権利」について話す機会が多かった。経緯はともかく、そういった話題を正面から話すことができたのは貴重な体験だったと言える。ただその時いつも私が感じていたのは、『ひよこの眼』の感想文を読んだときのような居

心地の悪さだった。涙ながらに自分たちの「自由」や「権利」を訴える生徒の前に、「泣くほどのことじゃないでしょう」と何度つぶやいたことか。何より腹立たしかったのは、一部の大人が彼らの涙を必要以上に美化したことだった。「自由」と「権利」を訴える高校生は常に清く正しく、それを見て「泣くほどのことじゃないでしょう」とつぶやく大人は常に汚れて間違っているといった類の、感情的で単純な二元論。しかもそれを掲載したのが『世界』（岩波書店）だったことが、私には驚きだった。論理的に読み、考える能力が大人も含めて徹底的に欠けているとさえ感じた。

少し話題を広げすぎてしまったかもしれない。ただそのことをきつかけに、私はコトバを用いて論理的に読み、考える能力をつけることの必要性を痛感した。「書くこと」「話すこと」はもちろん大切だが、国語科として「読むこと」「聞くこと」の領域でやらなければならぬことはたくさんある。文学にこだわること、「国語なんかできなくても困らない」と言わせてしまおうとしたら本末転倒の誹りを免れない。言語生活に欠けているものを、学校教育の中の国語科という限られた条件の中でどう補っていくべきか、現実の課題として考えていくべきである。

（埼玉県立所沢高等学校）

国語から国際理解へ

— 小学校「総合学習」の試み —

大川 育子

指導要領改訂を前に、「総合学習」の在り方を巡る議論、試行がある。従来からの「国際理解教室」を拡大する学校も多い。そのゲストティーチャーとして、横浜市の四つの小学校で教壇に立った経験から、報告したい。

帰国家庭の多い当地では、地域の力を借りたい学校とボランティアでありたい保護者の思いが合致して、国際理解教室を多様に展開できる素地がある。私は中華人民共和国からの帰国児童の親として参加した。

学校からは「生活した外国の今の様子や体験談を具体的に話してほしい」という要請があつたので、それぞれ、滞在国から持ち帰った物や写真をみせたり、実演したり、試食したりと、単発の授業にふさわしい盛り沢山の内容になった。五官に訴えながら異文化に触れるのが、ねらいだ。

わが中国班もそれに倣おうとしたが、欧米の各班が異国らしさを端的に披露できるのに比して、こちらはことごとく慎重にならざるを得ない。なぜだろうか。

一つには、主語の問題がある。児童は「中国」という外国を単純な切り口で知ろうとするが、大陸と台湾、香港をひっくるめて、

中国という主語で語ることはできない。大陸に限っても、多民族、多言語、寒帯から亜熱帯に広がる大地に十二億の人間が住んでいる。衣食住の習慣も学校生活も異なり、言えは言うほど、「群盲象を撫す」ということになる。さらに北京に限定したとしても、期待される「四千年」というキーワードで今の都市生活を伝えることには違和感があり、台湾との差異が浮彫りになる。

もう一つには、日本人のアイデンティティに関わる点があることだ。北京土産「十二支」壁飾りを掲げると、三年生でも自分の干支を知っており、十二を語っていた。四年生以上の書写の作品は毛筆である。六年生になると、常用漢字一九四五字のうち一〇六〇字を学んでおり、四字熟語の知識もある。それらの学習は日本人として必要なものとしてであって中国から伝わったと言うこととは拘らない。欧米との比較で、箸を使う文化を和風であると認識しても、中国文化圏の産物であることは意識せずに素通りしてきている。中国伝来のものを日本固有のものとして消化する。

結局、児童は国語、日本史、日本文化を学ぶうちに、中国に接近しており、中国のことを識るほど「日本」を発見することになる。この接点をクローズアップすることこそが国際理解教室の真骨頂だといってもよいのではないか。両者を国境で隔てて対比させるのは不自然なのだ。

実際、国語の教科書から中国理解へ導くには、どのような方法があるだろうか。

五年生の場合、「地図が見せる世界」⁽⁴⁾や「大陸は動く」⁽⁵⁾のような内容の説明文は導入に適している。言葉に関する單元には「漢

字の成り立ち」「同じ音の漢字」「和語と漢語」「熟語を使って」「漢字の読み方と使い方」などがある。日本語の漢字と中国語の漢字とを比較してみることで、背後にある異文化への関心を引き出すことができる。中国語は日本語の由来を考える好材料だ。各学年の国語教科書に則した「国際理解教室」の授業の可能性を探ることは、国語教育の見直しにも通じるような気がする。

注

(ポランティア講師)

- (1) 青葉台、恩田、本郷台、南山田、各市立小学校
- (2) ポランティアグループTIGALの国際理解教室プロジェクトは出前授業を請け負っている。
- (3) 光村図書『国語五上』
- (4) 日本で用いる世界地図と欧米などで用いる世界地図とを比較して「同じものでも、見方を変えるだけで、別の一面を見せることにもなる」と説く。筆者は永田力。
- (5) アルフレッド・ウエゲナーが「パンゲア（すべてが一つの大陸）」の仮説を起し「大陸移動説」を証明していった過程を紹介している。筆者は大竹政和。

レポートの指導

依藤 美佐

本校では、毎年五月に三年生の修学旅行がある。行き先は京都・奈良。国語科では生徒に「修学旅行レポート」なるものを課している。京都・奈良を旅行して触発されたテーマを見つけ、四百字詰め原稿用紙三十枚ほどのレポートを作成する。レポート提出は十一月二十三日「勤労感謝の日」の翌日。つまり、一・二学期に亘つての課題である。成績は「現代文」に入れられる。このレポートが三年生にとつての大きなハードルであり、生徒達は一年生のときからこのレポートの噂で戦戦兢兢としている。しかし、指導の一年を思うと教員側も戦戦兢兢である。三年生は一学年二〇〇名弱で、四クラスあり、国語教員が一人ずつ四クラスに分かれ、指導にあたる。ほとんど全員が大学に推薦で進学できる環境であるからこそできる指導だとは思われるが、今回はこの指導について報告したい。

修学旅行前には、授業では京都・奈良を題材にした教材を扱う。生徒が旅行をする際、何かに興味を持つてくれるようにとの配慮からである。今年は堀辰雄『大和路』を教材とした。

『大和路』の中には奈良の様々な寺や仏像、小径が紹介されている。地図を生徒に配り、主人公の歩みを追いながら授業を進め

る。仏像・寺などは、資料やプロジェクトを使って興味関心の幅を広げられるよう配慮した。修学旅行の自由行動を決める上の参考になると思つているらしく、授業に積極的に参加する生徒が多い。質問も多く、こういうときの教員は、さながら旅行ガイドである。

『大和路』の中の『十月』には、主人公が東大寺戒壇院の広目天像を見て「これはきつと誰か天平時代の一流人物の貌をそっくりそのまま模してあるにちがいない。そうでなくては、こんな人格的に出来上がるはずはない」と言つた箇所があるが、広目天像の写真を見せたとき、生徒は教材の主人公の心情どおりに見つめ鎮く者もいれば、誰かを当てはめる者もいた。「シアトル・マリナーズの佐々木に似てる」と言つた生徒もいた。驚いたことに、主人公の旅を追つて授業を進めていくと、主人公の心情を素直に理解できるようである。

さて、修学旅行から帰つてくると、生徒達は口々に行つた場所を話してくれるが、授業で説明した場所を訪れている生徒も多い。中には自由行動の時間を使って浄瑠璃寺を訪れた生徒もいる。奈良市街から離れており、自由行動の時間を精一杯使つて訪れたのであるが、『大和路』で書いてあつた浄瑠璃寺と馬酔木が見たくて」などと言われると、非常に嬉しいものである。

修学旅行から帰つてきてからは、旅行で見つけたテーマに沿つて資料を集める指導をおこなう。夏休み中に生徒自身で資料を集められるようにとの配慮からである。自分が調べたいことはどのように調べるか、辞典や文献のあたり方を説明している。最近

では、インターネットのホームページなどを資料とする生徒も増えてきたため、授業でインターネットの扱い方に関するプリントを配り、資料として使えるものと使えないものとの区別をつけさせるようにしている。

学校の図書室だけでは飽きたらず、資料を大学の図書館まで探しに行く真剣な生徒も多い。本校は大学の付属高校であり、大学の図書館に入ることもできるし、高校のパソコンで大学の図書館の蔵書をチェックすることもできる。高校生がレポートを書く環境としてはかなり恵まれている。その恩恵を十分に受けられるようにと、教員も大学図書館の活用を勧めている。

夏休みが終わると、実際のレポートの書き方を授業で説明する。文章構成の基礎、文献の引用の仕方などをプリントを使って説明するのだが、論文の基本構成を授業で説明しても、生徒にはピンとこないことが多い。実際には、それぞれのテーマに沿ってどのように構成しようと思っているのか、個人指導をすることになっている。そのときに必ず目次を書いてくるように指示する。資料を集めただけで満足している場合が多いので、漠然とした論を意識のほらせる上で、目次作りは有効であると考えている。それらの資料を持って、生徒が休み時間や放課後に質問に来る。資料と目次を見て、この構成で言いたいことが説明できるのか、生徒と一緒に考える。生徒のレポートの進度もさまざまである。資料にマンガを使う者や、解明不可能な「謎」を解き明かそうとするテーマを見つけたし、「……の謎」といった、謎の部分だけを強調した本を資料として使おうとする生徒も多いが、それはここで

の個人指導で淘汰され、テーマを絞ることを勧められる。中には全くテーマの思いつかない生徒もいる。そのときには、修学旅行で興味を持ったことを気軽に話してもらい、その会話の中からテーマを引き出す手助けをしている。これらの個人指導がかなりの重労働で、授業と校務の合間に常に生徒と面接をしているという毎日である。生徒の出してきたテーマに何かヒントを与えてあげたいと考えると、こちらも調べなければならなくなる。そうやって教員自身の宿題も毎日課される始末である。

レポートは、生徒の興味に沿って様々なジャンルに亘る。昨年の例で言うと、『法隆寺の建築様式』『明恵上人の夢と「夢の記」』中には、『京都タワー建設に対する市民運動』という生徒もいる。国語科だけでは対応しきれないテーマも多いので、他教科の教員の応援もお願いしている。

十一月にレポートが提出されると、今度は添削が待っている。一月末の成績提出まで、教員は添削戦争である。奉職して今年で五年になり、このレポート指導に携わって四年、大量のレポート添削に追われ、まともに正月を迎えたことがない。しかし、卒業生からは、「学校の授業の一番の思い出は修学旅行レポート」とよく言われる。高校生活で一番苦しめられた課題がこのレポートだからなのであろうが、「大学に入ってから、書いてよかったと思った」と言われると、今年もがんばるか、と思いき直すのである。

これからの指導にあたっては、総合的な学習を勧めている社会の流れをふまえ、国語という枠にとらわれず学校全体で関わって

いけるよう模索中である。生徒と共に学び合う貴重な教材として守っていくと共に、指導方法を常に改善していくことに務めなければならないと考えている。

(慶應義塾女子高等学校)

社会性を身につける授業の実践

—他教科と協力して—

塩崎 裕 香

(はじめに)

中高一貫の女子校に勤めて三年目、今年度は中二の担任をしている。本校は「社会性を身につけさせる」ことを大きな目標としており、それを国語科でどう実践するかを私なりに考え、実践したことを、一例を挙げて報告したい。

(年間指導計画の立案)

年度の終わりに次年度のシラバスを科目ごとを考え、四月には全学年・全教科をまとめたものを生徒一人ひとりに渡している。全員がきちんと活用できているかは別として、それを見れば一年間何を学習するのか、今学習していることのねらいは何なのか、がわかるようになってきている。昨年度の終わりに中二のシラバスの原案を作る担当になった私は、社会性を身につける学習の一つとして、大テーマに沿って班で小テーマを決め、情報を収集、整理し、意見を加えて発表する、といったプレゼンテーションの学習

をすることを考えた。どんな職業についても、自分の意見を求められる機会が多い。私も教員になる前の一年間の民間企業研修でブライダルコーディネーターを経験したが、新郎新婦の要望に合うような披露宴を提案するのに、披露宴の基礎知識からこの花屋はどんな風には飾るといったことまで、様々な情報を手に入れた上で、他の会場にお客を取られないようにセールストークをする必要があった。

せっかく学習するのであるから、単にプレゼンテーションの技術が身につけばよいというわけではなく、テーマも生徒が興味を持ち、今後の学習に役立つものになりたい。教科書にもテーマの一例が載っているが、よりよいものはないか。そう考え、修学旅行につながるものにすることにした。本校では中三でイギリスに行っている。イギリスをテーマにし、この学習を通して、修学旅行への興味も持つてもらおうと考えたのである。

ただ、国語科の教員はイギリスについての知識があまりない。そこで社会科のシラバスを目にしたら、中二で修学旅行の事前学習としてイギリスに関するレポートを書くところ。これは協力し合わない手はないと思ひ、さっそく社会科の教員に話を持ちかけて、ぜひ一緒にやろうということになった。社会の授業でイギリスについての知識を得、班ごとにテーマを決め、国語・社会両方の授業時間を使って情報を収集し、国語の授業で情報を整理し、意見を加えて発表台本を作る。そして発表・レポートは国語科・社会科の両方の教員が評価する、という計画である。時期は社会科のシラバスに合わせ(中二は歴史を学習している)、二学期の

中間テスト後にした。文化祭も終わり、落ち着いた時期でちょうどよいとも考ええた。

また、情報収集に際しては、図書室と情報科の協力がなくてはならない。幸いなことに、二〇〇二年度からの新カリキュラムで「情報」の授業が始まる準備のため、本校は二〇〇一年の秋にCIAI教室をリニューアルすることになっていた。一クラス全員にコンピューターが一台ずつあり、インターネットにアクセスできるようにするのである。本来ならば二〇〇一年度内は使用できないことになっていたが、情報科に計画を話し、テストケースとして特別に利用させてもらえることになった。図書室の協力も得られた。

このようにして、大まかな計画が決まった。

〔細かな授業計画の立案〕

本校は一年生五クラスあり、今年度の中二は国語も社会も三人が担当している。つまり、合わせて六人の教員が今回の学習に関わるわけである。次の国語の授業までに社会ではここまで進まないとならない、ということになるので、綿密な計画と、何度かの打ち合わせ、そして協力が必要だった。学習直前の九月十一日には世界的な事件が起き、今年度の中三はイギリス修学旅行を断念して関西に行くことになった。来年度はイギリスに行く予定だが、情勢次第でわからないことから、行き先がどこになってもいいように、大テーマを急遽「日本を宣伝しよう」に変えた。

試行錯誤の末にできた授業計画案が次のようなものである。

修学旅行準備レポート「日本を宣伝しよう」学習活動概要案

(平成十三年度 二年国語、社会)

学習の目的

《国語》まとめた情報と意見を発表する

《社会》修学旅行に向けて、日本について関心を深める

学習活動の流れ

1. 学習課題の理解 《国語一時間》

* 修学旅行の事前学習を兼ね、班で調べ、書画カメラを使って発表し(発表時間は十分、優秀作品は学年全体の前で発表する)、個人でレポートを仕上げることをおこなう

* 情報収集の方法・情報の倫理について理解する

2. 問題意識の喚起 《社会一時間》

* 現在のイギリスの政治制度・社会構造の前提として、市民革命前後の歴史を知り、日本との違いを意識する

3. 活動テーマの設定 《社会一時間》

* 班に分かれ、小テーマを決める

* イギリス(欧米など広げても可)にはなく、日本にはある長所を見つけ、なぜそのような違いが出てきたのかを客観的な根拠をできるだけたくさん示して説明する

4. 活動計画の立案 《国語一時間》

* 課題追求に必要な情報収集活動を分担し、計画を立てる

5. 情報収集活動の展開 《国語・社会一時間》

* 担当した事項について調べ、必要な情報を収集・記録する

6. 情報処理活動の展開 《国語一時間》

*収集した情報を整理・分類し、活動テーマに照らして有効性や説得力などを検討する

*情報をもとにテーマに対する自分なりの考えを明確にする

*収集・処理した情報を再構成し、書画カメラにのせるスライド・発表台本をまとめる

7. 情報発信活動の展開一《国語・社会・LHR三時間》

*クラスごとに、ミニ発表会を行う

*LHRの時間を使い、学年全体が講堂に集まる中、各クラスの代表の班一つ（国語科・社会科）一名の教員で優秀なものを選びが発表する（保護者にも声をかける）

8. 情報発信活動の展開二《国語一時間》

*レポートの書き方を学ぶ

*各自で発表したものをレポートにまとめる（冬休みの宿題）

*レポートを冊子にまとめる（クラスごとまとめて一冊にする）

評価

国語・社会それぞれで評価する

〔授業の実際〕

生徒の活動のうち一番難しかったのは、意見とその根拠を述べることであった。テーマに関連する情報を集めることは誰でもできる。しかし、自分の意見を決め、それを言うために必要な情報だけを取り出すのは、班活動でも難しかった。班ごとに指導していかうとしたが、計画した時間数では足りなかった。また、意見

と根拠を述べる学習を事前にする必要があったと反省した。

発表では、生徒一人ひとりに聞き取りメモをとらせた。「実物を見せていてわかりやすく伝わった」といった感想もある中で、反省点で目立ったものを挙げる。

*読む文章を（スクリーンに）見せるのではなく、他の資料などを見せたほうがいいと思った。

*もう少し、写真や絵を増やして、わかりやすく、聞き手をひきつけるような発表にしたほうがいいと思った。

また、発表を聞いた保護者にもアンケートをとった。

*よく調べているのですが、だからだと読むだけだし、しかもメリハリのない発表で何を言っているのかわかりにくいという点が最大の欠点です。もっと工夫するべきです。

*言葉が難しいところがあり、早口で聞き取りにくいところがあり残念（イラストでフォローを）。

このような感想を見て、プレゼンテーションの指導は段階的に時間をかけてする必要があると感じた。

最終的に個人でまとめたレポートは、文中心でまとめるように指示した上で、あえて枠だけを決めてレイアウトも考えさせた。現段階ではまだ集めている途中だが、発表を経ても、自分の意見を言うことや見せる工夫は身につけていないようで、これも引き続き段階的な指導が必要だと感じている。

〔授業を終えて〕

他教科と連携を取りながら授業を進めるのは大変なことだった。しかし、生徒にとっては、二人の先生が見ているのは新鮮であっ

たろうし、他教科との学習のつながりを感じて学習効果があったようだ。

プレゼンテーションについては、中二は初めての学習で、今まで見る機会もあまりなかったと思う。実際にやってみて、また他の班の発表を見て、こうすればわかりやすく伝えられるというのが初めてわかった、という状態だろう。予めプレゼンテーションの見本を見せるなど、より工夫すべきだったと指導者として反省した。現在、国語科会議では、新カリキュラムについて話し合っており、情報科でも来年度からの情報の授業の準備をしている。ぜひ今回の反省を踏まえ、段階的で身につくプレゼンテーションの指導を考えたい。

〔終わりに〕

社会性を身につけさせる指導は、プレゼンテーションの指導ばかりではない。例えば今年度もう一つ思いついて実践しているものとして、手紙の学習がある。国語の教科書で手紙の単元を学習した後、ホームルームで小学校でお世話になった先生に向けて実際に手紙を出している。「来てください」は丁寧に言うかどうかなどという質問を受けながら、敬語の学習をしてもらっている。

学校目標を踏まえ、生徒の現状を把握し、他教科との連携を取りながら、国語科の教員として何ができるかを考えるのが大切だと実感している。今後とも、効果的に社会性を身につけるための授業を考え、実践していきたい。

(品川女子学院)

早稲田大学国語教育学会会則

(平成十年六月改正)

- 第一条 本会は、早稲田大学国語教育学会と称する。
- 第二条 本会の事務局は、早稲田大学教育学部内におく。
- 第三条 本会は国語教育に関する研究、会員相互の親睦、並びに後進の育成をはかることを目的とする。
- 第四条 本会は、前項の目的を達成するために、つぎの事業を行う。
 - 一、大会・例会・研究会・講演会などを開催。
 - 二、研究授業および授業参観。
 - 三、機関誌の発行。
 - 四、その他。
- 第五条 本会は、国語教育に関心を有する早稲田大学の教員(旧教員を含む)・校友・学生およびそれらの紹介による人々をもって会員とする。
- 第六条 本会に、つぎの役員をおく。
 - 代表委員(一名)
 - 委員(若干名)
 - 監事(二名)
- 第七条 本会に顧問をおくことができる。
- 第八条 役員は、総会において会員のなかから選出する。
- 第九条 役員は、任期は二年とする。但し、重任を妨げない。
- 第十条 本会は、会務および事業を推進するために、事務局・編集委員会等をおく。
- 第十一条 会員は所定の会費を納めなければならない。但し、学生会員は半額とする。
- 第十二条 本会は、会費・寄付金・その他によって運営する。
- 第十三条 本会は、年一回総会を開く。但し必要に応じ、臨時総会を開くことができる。
- 第十四条 本会の会計年度は、毎年四月一日からはじまり、翌年三月三十一日をもって終わる。
- 第十五条 この会則は、総会の議決によって変更することができる。